

詩家の四始說到就いて

渡邊弘一郎

本小論は昭和十四年十二月九日東京文理科大学漢文學會に於いて發表せるものに稍々整備を加へたもので、いづれ試論の域を出でず、筆者自身既に意に滿たぬ所も多々有るが、且く大方の叱正を乞ひ他日の補修を期したいと思ふ。猶小論の成る迄終始御懇切なる御指導を賜つた小林信明先生には、謹んで謝意を表する次第である。

一

詩家の學に於いては、四始の説といふものがある。毛詩の大序に、

詩有六義焉。一曰風、二曰賦、三曰比、四曰興、五曰雅、六曰頌。上以風化下、下以風刺上。主文而譎諫、言之者無罪、聞之者足以戒。故曰風。至于王道衰、禮義廢、政教失、國異政、家殊俗、而變風變雅作矣。國史明乎得失之迹、傷人倫之廢、哀刑政之苛、吟詠情性、以風其上、達於事變、而懷其舊俗者也。故變風發乎情、止於禮義。發乎情、民之性也。止乎禮義、先王之澤也。是以、一國之事、繫一人之本、謂之風。言天下之事、形四方之風、謂之雅。雅者正也。言王政之所由廢興也。政有小大、故有小雅焉、有大雅焉。頌者美盛德之形容、以其成功告於神明者也。是謂四始。詩之至也。

とあり、史記の孔子世家に、

關雎之亂、以爲風之始。鹿鳴爲小雅始。文王爲大雅始。清廟爲頌始。

と記され、詩緯汜歷樞（毛詩正義引）に、

大明在亥、水始也。四牡在寅、木始也。嘉魚在巳、火始也。鴻雁在申、金始也。

とあるのがそれである。今此の三者に就いて、夫々其の四始の説を考察するに、

(イ) 毛詩大序の四始

毛詩大序の四始の論は、一讀して知らるゝが如く、言ふ所が甚だ明瞭を缺いて居り、「是謂四始」と云ふものゝ、是が何を指すのであるか餘り明瞭でない。従つて見方に依つては、是が風・小雅・大雅・頌の四者を指すとも、或は又風・雅・頌・變の四者を指すとも考へられるのであるが、諸橋教授著經學研究序孔穎達は鄭玄の説を引いて、四始を以て風・小雅・大雅・頌の四者なりと爲し、四始の始が人君興廢の「ハジメ」であると云ふ意味と解して居る。

四始者、鄭荅張逸云、風也。小雅也。大雅也。頌也。此四者阮元校勘記云、此人君行之則爲興、廢之則爲衰。又箋云、王道興衰之所由。然則此四者是人君興廢之始、故謂之四始也。（毛詩正義）

鄭玄の述べ方は稍と漠として居るが、然し其の旨とする所は、恐らく孔穎達の言の如くであらう。

(ロ) 史記孔子世家の四始

次に史記の孔子世家の言ふ所を見るに、孔子世家の四始の論は、風・小雅・大雅・頌の夫々の最初の詩篇たる關雎・鹿鳴・文王・清廟の四者を四始としたと考へられる。即ち四始の始を「ハジメ」と解した點は前説に同じいが、其の「ハジメ」の意味する内容が異つて居るのである。

皮錫瑞は毛詩の關雎の序に「關雎后妃之德也。風之始也。」とあるのが、恰も此の孔子世家の「關雎之亂、以爲風之始」とあるのと一致する所から、史記の四始を以て毛詩の大序の四始と異らずとして居るが、此は一つには毛詩大序の書方の餘り明瞭でない所から起つた考でもあるらしく、前の孔穎達の正義に記された所から考へて、更に又、鹿鳴・文王・清廟等を夫々小雅・大雅・頌の始であるとして關雎と併せて之を四始なりとするのが、毛詩大序の四始と直に同じとは斷じきれないので、暫く皮氏の論を以て疑とする外はないと考へられる。即ち、史記に見る所は、詩經の風・小雅・大雅・頌の四者の夫々の最初の篇を取上げて四始と稱して居るので、詩の配列に基く説であり、其等の詩篇は恰も毛詩

の配列に於いても風・小雅・大雅・頌の最初の篇となつては居るが、毛詩大序は決して詩篇の配列に基いて説を成しては居らぬ。

(ハ) 詩緯氾歷樞の四始

叔、詩緯氾歷樞の四始はといふに、此は、大明・四牡・嘉魚・鴻雁の四詩が、夫々五行の水・木・火・金の始であるとするものである。

因みに此は五行の内の四者であるし、又緯書の文は殘缺のものが多くから、右は初より四者なのではなくして、何か恐ろしくが缺けたのではないかとの疑を抱く向があるかも知れぬが、孔穎達之を引用した當時は未だ緯書も大分有つた筈であるし、唐書藝文志參照それに

建四始五際而八節通。(太平御覽・初學記引詩緯推度災)

集微揆著、上統元皇、下叙四始、羅列五際。(同上引詩緯含神霧)

等の詩緯の文に照し見る時、此が四始の説である事は間違無いであらう。

惟ふに詩緯が四始の始を「ハジメ」と解する點に於いては、司馬遷や鄭玄・孔穎達の徒と同じで、殊に四始の始を「ハジメ」と解し、且つ四つの詩篇を以て之を示す所は、孔子世家に云ふ所と似て居るのであるが、併し此は四始を五行の内の水・木・火・金四者の始とするのであつて、其の考の根柢は決して同一ではない。のみならず、詩の大序の四始が風・小雅・大雅・頌を指し、孔子世家に云ふ四始が風・小雅・大雅・頌の中の四詩篇であるのに對して詩緯の云ふ所は小・大・二雅中の四詩篇を指すと云ふ實際上の大きな差があるから、此の詩緯の説は兎に角前二者とは明瞭に異つたものである。

要するに、以上の四始に關する三つの説は、何れも異なる構想を持つものと考へられるのであるが、此の三者三様は如何に解さる可きであらうか。

惟ふに、毛詩の大序に對する孔穎達の解を以て、直に毛詩家の説とするのは危険な點がないでもないし、又鄭玄の詩説に關しては、其の系統上多少の問題を残さないとはいないが、毛詩大序の説く所、並に大序に本づいて述べられたと思はれる鄭氏の説や、また其の敷衍と見られる孔氏の論は、まづ／＼毛詩家の説と見て差支なからう。又史記の詩説に就いては、多くの學者は魯詩説を執つて居る。従つて孔子世家の四始説に於ても、魏源及び陳壽祺・喬樞父子等は、此を以て、魯詩説であるとしてゐる。（魏源詩古微・陳喬樞魯詩遺説攷參照）更に詩緯の説に關しては、元來緯書に於ける經説は、春秋説といひ尙書説といひ、凡て齊學説と一致する點から考へて、齊詩に屬するものではないかと考へられる。

また此の詩緯の説を齊詩の四始説であるとする事は、諸家の意見の一致する所である。して見ると、詩家四始説の多樣性は、一に齊・魯・韓及び毛の四家詩説の相異によるものではないかと思はれる。只韓詩家の説が如何であつたか丈は、知る由がないが、魏源は服虔の左氏傳の解釋から判斷して、韓詩の四詩説は、周南十一篇、小雅鹿鳴十六篇、大雅文王五十四篇（此は今の毛詩に於て見る篇目）及び周頌を以て夫々風・小雅・大雅・頌の正始とするものであるとしてゐる。此の場合、四始の始は、「ハジメ」ではなくして「正しい詩」と解される様である。（詩古微參照）

以上は四始に關する諸説を擧げ、更に後世諸家の見解を交へて之を整理し、其の多樣性を以て詩の四家に起因するものではないかと考察したものである。が此の中、齊詩説と考へられる詩緯の説以外の四始説は、上述以上に別して著しい展開を窺ふことが出来ない。即ち毛詩家の四始は、結局に於て詩經に記された所を行ふか行はないかが人君興廢の始となるといふ丈のことであり、魯詩家の四始は、關雎・鹿鳴・文王・清廟の四詩が夫々風・小雅・頌の始の詩であるといふ位の意にしか取れず、又韓詩家の四始と想定される所も、數篇の詩群を以て、風雅頌各類の代表作品と見ようとする程度の意味にしか考へられない。従つて、毛・魯・韓の三家に在つては、四始といふことも、それほど特別に深い意義を持つたものとは思はれないが、獨り齊詩に在つては、特異の豫想を以てして、獨特の構成内容を有する最も興味

有る問題を提示してゐる。以下専ら此に就いて考察を進める。

三

詩緯汜歷樞の四始説は、大明・四牡・嘉魚・鴻雁の四詩を夫々水・木・火・金の始とするのであるが、大明以下の四詩が水・木・火・金の始となり得るのは、此等四詩が又夫々亥・寅・巳・申の各辰に配せられてゐるに因る。即ち五行十二辰の配

當は、淮南子などに依ると、

甲乙寅卯木也。丙丁巳午火也。戊己四季土也。庚辛申酉金也。壬癸亥

子水也。（天文訓）

とあり、寅・巳・申・亥は何れも水・火・金・水の始に當つてゐる。此は極く普通に行はれる五行十二辰の組合せであるから、従つて大明・四牡・嘉魚・鴻雁が亥・寅・巳・申に配せられる限り、大明・四牡・嘉魚・鴻雁の四詩は、水・木・火・金の始であり得る。今、詩緯の云ふ所を圖示すれば、上の如くなる。一辰に三詩宛配する事、及び其の詩篇の順序等に就く魏源詩古微の云ふ所に従ひ、毛詩の配列に一致せしめて置く。

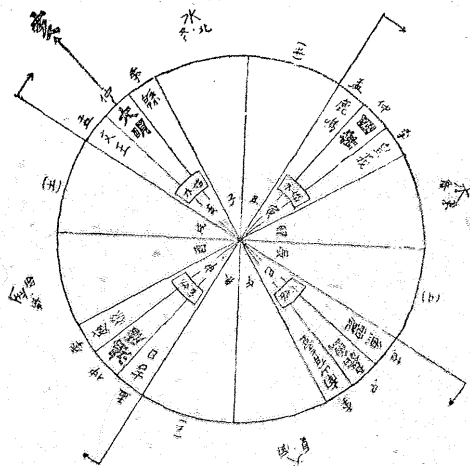
叔此の圖に就いて此の四始説の構造を見ると、

(一) 四始が亥から説き起こされてゐる。

(二) 一辰に三詩が配せられ、各辰を代表する詩篇は、各辰に配せられた詩篇の仲篇を以てする。

(三) 大明・四牡・嘉魚・鴻雁が、夫々亥・寅・巳・申に配されてゐる。

といふ三つの點から成り立つてゐる。何が故に四始は木に當る甲乙寅卯から説き起こさないで亥から始まるのか。何が故に各辰には三詩が配せられ、各辰は其の詩の仲篇を以て代表せられるのか。又何が故に大明が亥、四牡が寅、嘉魚が



巳、鴻雁が申に配當されるのであらうか。

四

四始が亥から説き起こされてゐることに關しては、從來種々の説が行はれてゐる。例へば陳喬樞の、
攷易緯通卦驗、以八卦配八節、始於乾主立冬、終於兌主秋分。始於乾者、乾在亥位、即詩四始之以亥爲始也。
(詩緯集證)

の如き、間接乍ら一の説明であり、又

凡推三期之數、皆從亥仲起者、陰陽之氣、分於西北、西北者乾位、萬物之所資始、故以是起數。(同上)
の如き、右と相俟つて説く所有らんとし、又彼は別に

案四始、以亥爲首者、水爲五行之本、其星元武癸女、天地所紀、終始所主、故推三朞之數、皆從亥之仲起也。
(齊詩翼氏學疏證)

等とも説き、様々に解明を試みて居るが、何れも核心を衝いて肯綮に當るものとは爲し難い。其の他にも種々の説があるやうであるが、齊詩の傳の夙に失はれた事が最大の原因となつて、猶ほ徹底的な斷案を見ない。

惟ふに此は右の如く一般論的に説く可きものではなくて、特殊の立場より出發して考へるべきものではあるまいか。

元來、亥は、漢人、殊に緯説に於て特別な位置を持つてゐる様で、後漢書郎顗傳の注に引かれた詩緯氾歷樞には、

凡推其數、皆從亥之仲起。此天地所定位、陰陽氣周而復始、萬物死而復蘇、大統之始。

等とある。殊に「大統之始」などと云ふ語は頗る注目するものである。

蓋し此等の説を成せし所の漢人にとつて、大統とは少くとも漢室の帝統を意味するのが最も直接な考方で、而して此の大統を至高至大絶對のものとする限りに於いて、此が一面に又宇宙間の陰陽循環萬物轉生の大原理を示すとしても、何等抵觸する所が無い。されば此は漢帝統の開初高祖と亥との間に何等かの前提的な關係を豫想せしめるものが有りは

しないかであらうか。

此に於いて史記・漢書に徴するに

漢元年^(乙未)十月、沛公兵遂先諸侯至霸上。(史記高祖本紀)

漢之興、五星聚于東井。(同天官書)

元年冬十月、五星聚于東井、沛公至霸上。(漢書高帝紀)

漢元年十月、五星聚於東井、以歷推之、從歲星也。此高皇帝受命之符也。故客謂張耳曰、東井秦地、漢王入秦、五星從歲聚、當以取天下。(同天文志)

と見えて居る。即ち高祖は乙未の年の十月に關に入つて霸上に至つて居るが、蓋し此の最初に關に入つたと云ふ事は非常に重要な意義を有ち、以後、諸英傑と天下を争ふに際して優先權を獲得した譯になるのである。従つて此は實に高祖大業成就の第一段階として、漢室にとつては正に其の大統の出發と考へられる譯である。「五星聚于東井。」と云ふ記述は、實に之を示して餘り有るものと思はれる。即ち五星が一所に聚るのは、漢書に

日月如合璧、五星如連珠。(律歷志)

とある所謂開關の状態と同じであつて、天地が開關して、一所に聚れる五星が夫々異なる速度で進行を始める、此の時受命の者有り、其の後或年數を経て再び元の状態に戻る時、新に又受命の者が起ると云ふのが、支那古代人の考方である。此等に就いては前掲漢書天文志以外にも、

帝起受終、五緯^{筆者曰、易緯乾鑿度鄭玄注曰、五緯五星也。}合軫。(開元占經引尙書考靈曜)

天地開闢、甲子冬至、日月若懸璧、五星若編珠。(初學記・太平御覽引尙書中候)^{同様の文、又同引尙書考靈曜に見ゆ。}

の如き例證が有り、尙書中候が主として符命の書である事は、既に前篇例へば朱彝尊等の論ずる所である。従つて右の文も亦受命に關りあるものであらう。右の史記・漢書の記載と綜合して見れば、沛公が霸上に至つた十月は正に漢の出發であると考へられる。而して十月は十二辰の配當に於いては恰も亥の月に

當るのである。但々「五星聚于東井。」なる漢書の記事には問題が有つて、間々此が不合理を説く者有り、或は「史承人言不改爾。」と云ひ、「是史官欲神其事、不復推之於理。」と云ひ、「五星聚井、班氏誤書。」と云ひ、漢書補注 參照。性の疑有りとしても、少くとも史記・漢書の記載を綜合して見た時、五星が東井に會して沛公が霸上に至つた時が漢の受命の時即ち漢大統の出發であるとする觀念の存在した事を知るのである。然る時、事實の如何は問題ではない。

猶ほ史記には「秦以冬十月爲歲首。」封禪書。（高祖）襲秦正朔服色。」歷の記載が有つて、高祖の正朔服色は秦を襲用し、十月を以て歲首としたと言ふのである。が此にしても其の由來を繹ぬれば、

（沛公）遂以十月至霸上、與諸侯平咸陽、漢書此の六、字無し。立爲漢王、因以十月爲年首。……（史記封禪書・漢書郊祀志）

以高祖十月始至霸上、故因史記作秦時本十月爲歲首、不革。（史記承張相傳・漢書張周趙任申屠傳）

と見えて居て、やはり高祖の霸上到達に起因すると云ふことになる。

斯くて漢室の出發と亥との間には切離し難い觀念の連鎖が生ずるのであつて、亥が總ての始まりなりとして、四始が亥より説き起される直接の理由も是に潛んで居るのではないかと思はれる。

右に就いては、一面に於て、高祖が霸上に至つた時を十月とする考が、實は漢が秦の正朔服色を襲用した後に於いて生じた一種の附會ではないかと云ふ疑も成立し得る。即ち前掲封禪書・郊祀志・張丞相傳等に見ゆる考と正反對の考が成立し得るのである。それは、

二年、東擊項籍、而還入關、問故秦時上帝祠何帝也。對曰、四帝、有白青黃赤帝之祠。高祖曰、吾聞、天有五帝、而有四何也。莫知其說。於是高祖曰、吾知之矣。乃待我而具吾也。乃立黃帝祠、命曰北時。（史記封禪書・漢書郊

祠志）

漢興、高祖曰、北時待我而起、亦自以爲、獲水德之瑞。（史記歷書）

と云ふ記事に依れば、高祖は自ら水德と爲して居るので、其の意味に於いて、秦始皇が自ら水德となして十月を以て

始際之義、蓋生於律。大明在亥者、應鍾爲均也。四牡則太簇爲均、天保夾鍾爲均、嘉魚仲呂爲均、采芣蕢賓爲均、鴻雁夷則爲均、祈父南呂爲均。漢初古樂未泯者如此。……古之作樂、每三詩爲一終。經傳可攷者、有升歌文王之三、升歌鹿鳴之三、間歌魚麗之三。然采芣・出車・杖杜、皆所以勞將士。常棣・伐木・天保、皆所以燕朋友兄弟。蓼蕭・淇露・彤弓、皆所以燕諸侯。亦三篇同奏、確然可信者也。說始際者、則與三昧相配。如文王爲亥孟、大明爲亥仲、繇爲亥季。其水始獨言大明、猶三昧之先仲次季而後孟也。故鹿鳴・四牡皇華、同爲寅宮、舉四牡以表之、魚麗・嘉魚・南山有臺、同爲巳宮、舉嘉魚以表之。（孔廣森經學卮言）

四始五際、分配詩之篇什、其法已失傳。程易疇欲推其說而不得、孔驥軒（廣）略見其緒而莫詳。竊攷古人作樂三終、三終之詩必連類相及。如鄉樂歌周南關雎・葛覃・卷耳三篇、又歌召南鵲巢・采芣・采蘋三篇是也。四始五際、即以三詩當一辰、一辰分孟仲季、以配三詩。寅・申巳・亥爲四始、始必資於中氣、故皆取其仲、……如小雅鹿鳴・四牡・皇華、爲升歌之三、於四始屬寅。四牡爲寅仲、故曰、四牡在寅木始也。……（黃以周經說略）

殊に黃以周の説に於いては、三詩を一辰に當て、一辰を孟・仲・季の三昧に分け、之を三詩に配すると明瞭に説かれて居る。従つて例へば文王・大明・繇の三詩は夫々亥の辰に於いて孟・仲・季に當る譯である。然らば此の際四始に於いて、何故に大明が亥に配せられた三詩の代表として示されるかと云へば、前掲三説の夫々終近くに説が有り、魏源の説では、仲を擧げて孟季をも代表せしむるは、恰も關雎・葛覃・卷耳の三詩が首篇關雎に依つて代表せられるのと同様であると云つて居るが、此は直接の説明とは爲り難く、又孔廣森の云ふ所も説き足らぬ感有り、黃以周の如きも、始は必ず中氣に資ると云つて居るが、其の理由が不明である。此等一般論的解明の外に、又進鶴壽は

大雅始於文王、小雅始於鹿鳴、猶易之有乾坤也。乾爲君道而文王一篇、述周家受命之由。坤爲臣道而鹿鳴一篇、叙嘉賓式燕之事、四始不以此爲始者、文王未嘗履帝位、至武王始有革命之事、詩緯汜歷樞曰、午亥之際爲革命、詩稱肆伐大商會朝清明、即其事也。故以大明爲始、此如易之有屯所以經綸草昧也。大雅既不以文王爲始、則小雅亦不以鹿鳴爲

始。鹿鳴言飲食宴樂。至四牡乃爲臣子勤勞王事。即題謂四始之缺。詩稱王事靡盬。我心傷悲。靡則鹽有缺限矣。故以四牡爲始。此如易之有蒙所以繫蒙禦寇也。（齊詩翼氏學「文王鹿鳴不爲始解」）

と云つて、之を特殊的立場より説いて居る。が、矢張り之を以て説き得て自然なりとは爲し難い。即ち此にては他の三始が亥に倣ふべき因由が明瞭とならぬのである。私は、此は一に方角の觀念から來るものではないかと考へる。

惟ふに、齊各に於いて、孟・仲・季の三椿を別け、其の三椿の中に其の辰の該中する所を求むれば、それは自然仲をとる事になる。即ち前掲の圖に於いて此の十二辰は各々の方向を有するのであるが、其の方向は十二辰の各々の角三十度の二等分線を以て示されるので、従つて此が一辰を三椿に分つた場合の仲に含まれ、仲は一辰の標準となるのである。即ち大明をして、亥を代表せしめた最大の理由は是に存するのではないかと思ふ。然る時は他の三始に於いても矢張り仲を以てする事が、何等不自然無く説明し得る。即ち前掲諸説の内、孔廣森・黃以周の説が當れるに近くして説き足らぬのである。

六

然らば何が故に亥に文王・大明・緡を、寅に鹿鳴・四牡・皇我を、巳に魚麗・嘉魚・南山有臺を、申に吉日・鴻雁・庭燎をと云ふ様に十二辰に對して詩の配當を爲して居るかと云ふと、先づ詩の範圍に就いて、迄鶴壽は

十五國風諸侯之風也。二頌宗廟之樂也。唯二雅皆述王者之命運政教。四始五際專以陰陽之終始濟會推度國家之吉凶休咎、故止用二雅。（齊詩翼氏學）

と云つて居るが、此は一應首肯し得る説明で、又事實上四始・五際に關する詩の範圍は二雅に限られて居る様である。

五際に就いては後に略述するが、要するに四始と密接な關係に在るもので、今差當り此の場合必要な部分として、其の配詩の狀を示せば、詩緯汜歷樞に

午亥之際爲革命、卯酉之際爲改正、後漢書郎顗傳引作神。在天門出入聽候。卯天保也。酉祈父也。午采芑也。亥大明也。（毛

詩正義引）

とあり、矢張り一辰三詩宛配せられ、一詩を代表的に示すのである。

其處で今十二辰と二雅の配詩の状を見るべく、稍々繁雜乍ら二雅の詩を列ねて見よう。

齊詩の配列は今知るに由無い故、且く毛詩の配列に基く。惟ふにテ

| | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-----|----|------|------|-------|------|----|----|------|----|------|----|--------|------|------|------|------|-----|
| 由儀 | 崇丘 | 由庚 | 南山有臺 | 南山有嘉魚 | 華黍 | 白華 | 南陔 | 魚麗 | 林杜 | 出車 | 采芣 | 采芣 | 伐木 | 常棣 | 皇皇者華 | 四牡 | 鹿鳴 |
| | | | | | 已(始) | | | | 辰 | | | | 卯(際) | | | 寅(始) | |
| 無羊 | 斯干 | 我行其野 | 黃鳥 | 白駒 | 新父 | 鶴鳴 | 沔水 | 庭燎 | 鴻雁 | 吉日 | 采芣 | 采芣 | 六芣 | 菁菁者莪 | 形弓 | 淇露 | 蓼蕭 |
| | | | | | 西(際) | | | 申(始) | | 午(際) | | | | | | 未 | |
| 信南山 | 楚茨 | 鼓鍾 | 小雅 | 無將大車 | 北山 | 四月 | 大東 | 蓼莪 | 谷風 | 巷伯 | 何人 | 巧言 | 小弁 | 小宛 | 雨無正 | 十月之交 | 節南山 |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 陽桑 | 黍苗 | 采芣 | 都人 | 苑柳 | 角弓 | 采芣 | 魚藻 | 賓賓初筵 | 青蠅 | 車螯 | 類弁 | 鴛鴦 | 桑扈 | 裳裳者華 | 瞻彼洛矣 | 大田 | 市田 |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 行葦 | 生民 | 文王有聲 | 下武 | 靈臺 | 皇矣 | 思齊 | 旱麓 | 械朴 | 縣風 | 大雅 | 文王 | (以上小雅) | 何艸不黃 | 漸漸之石 | 蒼之華 | 瓠葉 | 白華 |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 召旻 | 瞻印 | 常武 | 江漢 | 韓奕 | 烝民 | 崧高 | 雲漢 | 桑柔 | 抑柔 | 蕩板 | 民勞 | 卷阿 | 洞酌 | 公劉 | 假樂 | 鳧鷖 | 既醉 |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | |

(以上大雅)

此の内、小雅の南陔・白華・華黍及び由庚・崇丘・由儀の六篇の詩は只目のみ有つて其の詩無く、鄭玄も注して

遭戰國及秦之世而亡之。（南陔・白華・華黍注）

亦遭亂世而亡之。（由庚・崇丘・由儀注）

と云ひ、戰國の騷亂及び秦の焚書の間に於いて佚亡したと思はれ、陸德明が南陔、白華、華黍の諸詩について

此三篇、蓋武王之詩、周公制禮、用爲樂章、吹笙以播其曲。孔子刪定在三百一十一篇内。遭戰國及秦而亡。子夏序詩、篇義合編、故詩雖亡而義猶在也。（經典釋文）

と云つた所謂笙詩で、従つて漢代の詩説には關係無き故、一先づ之を除き、残りに就いて見るに、詩篇は大體寅に始まる十二辰に配して小雅の始より適當に順序良く配當し得る。

蓋し十二辰を寅より始めるのは、木星紀年法にも見る如く支那古曆の方法で、例へば淮南子にも

寅爲建、卯爲除、辰爲滿、巳爲平、主生。午爲定、未爲執、主陷。申爲破、主衡。酉爲危、主杓。戌爲成、主小德。

亥爲收、主大德。子爲閉、主太歲。丑爲閉、主太陰。（天文訓）

甲乙寅卯木也。丙丁巳午火也。戊己四季土也。庚辛申酉金也。壬癸亥子水也。……

（前天文訓）此は四季を一纏めにしてはあるが順序は

明らかに看
取し得る。

の如き順を示し、史記に於いても

以攝提格歲、歲陰左行在寅……歲陰在卯……歲陰在辰……以下（天官書）

等の如く、十二辰を寅より説き始めて居る。而して此は萬物の發生・繁茂・成熟・伏藏の過程を示すものとして四季の觀念とも一致し、春寅卯辰、夏巳午未、秋申酉戌、冬亥子丑。自然的であり、十二辰を子より説き起すのは更に後世的である。

而して更に又二雅に於いて刺りの詩と思はれるものそれは必ずしも現存の毛詩の
小序に依らずとも判る。を去れば、現存の詩經即ち毛詩に見る所と多少順序の異同は有りとしても、大體小雅の河水・鶴鳴・祈父の一連より斯干・無羊を距てゝ大雅の初頭に接する譯

である。

而して斯干・無羊は一連のもの故、或は刪詩の際に三脊の内の一を失つたものと考へ
刪詩の實情が明瞭でないから明瞭な事は云はれぬが要するに策詩を

含みて三百十一篇となる。別段刺詩でもないから、或は之を戌に配する事も可能であらうか。
存疑さすれば小雅より始めて配

詩を行へば、巧みに文王・大明・緡が亥の辰に當る譯となる。此の際祈父等の一連三詩が刺詩なりや否やは問題としても、

既に五際が五際の一に當てゝある以上、之を去らず、又或は齊詩説に於いては之を刺詩とは見なかつたであらうか。又

菁莪一篇が餘分の如くに思はれ、此は別に斯干・無羊と一連たるべきものとも思はれぬが、
若し一連と見得れば甚だ都合であるが此の邊に稍

々説明に窮する點が有るので、惟ふに此は齊詩の此の四始説が全く合理的なものであると迄斷じ得ず、從つて現在幾分

の不合理は殘し乍らも吾人は右を以て大體四始配詩の構成を推定し得るのではないかと思ふ。否却つて其の不合理性の

存在する事其自體より吾人は齊詩學説の一面の傾向を窺ひ得るのである。

此の場合此の不合理性の解明の一として、齊詩の詩篇の數が毛詩のそれと異り、現在毛詩に於いて見る所の詩篇

が齊詩と全く合致するものとは遽に斷じ難いのであると云ひ得れば好都合ではあるが、齊詩系統の詩緯の含神霧、

及び樂緯動聲儀・尙書璇璣鈴等の緯書に三百五篇と篇數を示せる由が詩譜序正義に見えて居り、此は現在毛詩の篇

數除筆と合するから、右は云ひ得ぬ事である。

唯四家詩の詩の配列に就いてのみは、各家夫々異なるものであつたらうと云ふ事は此迄も云はれて居るので、例へば、現

在毛詩の配列順序にては蓼蕭・淇露・彤弓の三篇は午の辰に當るべきであるが、五際説に於いて采芑を午に當る詩と爲す

所を以て見れば、少くとも齊詩に於いては毛詩と順序の異同の有つた事が知られる。從つて之に就いては種々の説有

り、孔廣森は

抑不言伐木而言天保、容三家詩次不盡與毛同耳。以次推之、采芑之三、正合辰位。惟采芑爲午、似蓼蕭之三彼倒在六

月・采芑・車攻之後、而爲未也。吉日・鴻雁・庭燎乃申也。祈父非酉之仲、又篇次之異。(經學卮言)

と説き、黃以周は

今詩倒蓼蕭三篇於菁莪之前則日於車攻之後、蓋毛詩所易。與十月之交雨無正同例歟。（經說略）

と説いて居る。

蓋し二者の考方が稍々異なるのは、孔廣森は三昧は仲をとつて代表と爲すとの考^前揭が四始にも五際にも及んで居る爲に、天保・祈父を仲と爲すのに對して、黃以周は四始の場合には始は必ず中氣に資る^前と考へ、一方五際に就いては

際交代之義、故皆取其季。（經說略）

と考へる爲に、天保・祈父は現在毛詩に於いて見る所の順のまゝで却つて采芑・車攻・吉日の所を入れ換へようと云ふのである。黃氏の云ふ午・申の所は稍明瞭を缺くが、恐らくは六月・吉日・采芑・車攻・鴻雁・庭燎の順にするものらしい。が然すると五際に於いて亥が其の仲の大明を以て稱

する譯の説明がつかぬので、黃氏は此のみを特別扱にして居るが、此は前述の詩篇の配當と各辰の標準觀とより考へて、孔氏の方がより合理的ではなからうかと思ふ。但し何れにせよ此の場合此は大きな問題ではなく、三家詩の詩篇配列が毛詩と異つて居つたにしても、それは些少の部分に止まつたであらうと云ふ事は想像し得るのである。寧ろ此の場合問題となるのは、十月之交に就いてである。それは前漢書翼奉傳の奉の上書中に

臣奉竊學齊詩、聞五際之要十月之交篇、知日蝕地震之效、照然可明。猶巢居知風、穴處知雨、亦不足多、適所習耳。

とあるが、論者或は奉上奏の年初元二年の甲戌の年なるを以て、十月之交を戌際に當てる者もあるが、漢書補注引蘇興曰、初元二年、歲在甲戌、後人因据、以十月之交篇爲戌際。……三昧說到於いて年の干支は直接に際に當る辰とは關り無いから、高祖の起りを亥二年とするが此は乙未の年に當り、郎顗が戊仲十年に在りとした陽嘉二年は癸酉に當る。翼奉傳の記載は十月之交と年の干支甲戌とが直接に結ぶとは考ふべきでないと思はれる。王先謙は詩句の「十月之交、朔日辛卯……」とある卯より卯際に依つて之を説いて居り、十月之交の篇を戌際に當てると云ふ様な事は考へぬらしい。

案翼奉所陳五際、連十月之交言之。蓋據卯爲陰陽交際也。鄭箋云、八月初日月交會、而日食。陰侵陽、臣侵君之象。

日辰之義、日爲君辰爲臣。辛金也。卯木也。又以卯侵辛、故甚惡之。正義引推度災曰、辛者正秋之王氣、卯者正春之臣位、日爲君辰爲臣、八月之日交卯食辛。辛之爲君、幼弱而不明、卯之爲臣、秉權而爲政、故辛之言所、陰氣盛而陽微生、其君幼弱而任卯臣也。此鄭所據、釋此詩爲周之十月。與翼奉言卯行陰賊正合。(漢書補注)

即ち十月之交篇中の卯の語を中心として卯際に依り事を説いて居ると見て居るのである。恐らく此は後者を優れりとするべきで、詩篇の配當と直接に結んで考ふべきではなからう。一面より考ふれば、若し刺詩十月之交を戊辰に配すると、それ以外の刺詩數篇を距て、大雅の初に接する事の一應の説明すらつかぬ譯となるのである。既に吾人が實際配詩に刺詩を除く事を推測して居る以上、十月之交を戊辰と爲すには、更に積極的理由を必要とするのである。

然らば刺詩を除外して巧みに配詩を行つたとすれば、其の理由は何かと云ふ事になると、今遽に説き明し難いが、刺詩を除外して考へる以外に更に適切な解明の道を知らぬのである。而して又その事情が不明は不明なるが儘に、唯此だけの想像は爲し得る。即ち齊詩説に於ける此等詩篇配列の順序は、文王・大明・緜が亥の辰に配當せられる事が必要なのであり、又其處に四始説の根本的な一主張が有るのではないかと云ふ事である。勿論、齊詩説其者が諸他齊學各經説に鑑みて見て、其の構成が全く合理的であつたと迄は考へられず、從つて今日よりして只此が合理性のみを求めて解決せんとする事は、却つて事の正鵠を失する事無しとせぬのであつて、彼等齊詩家は恐らく何等かの理由を附して刺詩を措きて而して小雅の初より十二辰への配詩を行ひ、文王等三詩を直接に亥に當る様にしたものではなからうか。而して後述の如く主眼點が文王等三篇に在る爲に、亥以後即ち子丑に就いては顧みる所が無かつたのであらうか。今亥以後に關しては刺詩以外のものが子丑に當てるよりも數多くて説明がつかない。

然らば文王・大明・緜の詩を高祖にゆかり有る亥前に配した事の根本主張は何か。蓋し文王・大明・緜は如何なる詩かと云ふに、實に此は周の文王・武王が天の大命を受けて理想的大王朝周室を建設する事を歌つたものであつて、而して漢人の觀念に於いては、高祖の創業は正に文王・武王の功業に比せらるべきものでなくてはならない。

吾人は此處に於て、文王・大明・緜の詩を亥に當てる所に四始説の根本的な一意義が有ると思ふものである。即ち四始の

説には純粹に學の爲の學ならぬ漢代致用學の一面が歴然と現れて居るのであつて、齊詩家は詩の中より或特殊なるものを取り上げ、之に特殊なる意味を結合して行つたものである。

即ち彼等齊詩家は當年に於ける理想的王朝周室の創業を歌つた所の詩の文王・大明・緜を高祖にゆかりの亥に結び、斯くして高祖創業の功を偉大確實ならしめて漢室に阿ねる一面、詩が漢室にとりて斯くも密接なる關係あるものなりとして、自己を主張するのである。物皆亥仲に起ると云ひ、四始を亥より説き起す事も前、是に至りて自づと明かである。

七

以上大體齊詩四始説の構成を陳述した譯であるが、然らば何故に之を水・木・火・金の始とはつて居るのであらうか。是に於いて、以上の如く組織せられたる四始説の行はれた意義が探究せられねばならない。

陳喬樞は齊詩の學を明かにせんとするに當り、三大旨を擧げて

宗旨有三、一曰四始、明五行之運也。二曰五際、稽三期之變也。三曰六情、著十二律之本也。（詩緯集證叙）と云ひ、又

四始五際者、所以明陰陽五行終始盛衰之理。（詩緯集證）とも云ひ、更に

大明詩廢、則智缺而水失其性矣。四牡詩廢、則仁缺而木失其性矣。嘉魚詩廢、則禮缺而火失其性矣。鴻雁詩廢、則義缺而金失其性矣。四始皆缺、則金木水火土而土亦失其性矣。金木水火、非土不成。仁義禮智、非信不立。詩陳四始、蓋欲王者法五行而正百官、正百官而理萬事、萬事理而天下治矣。政教之所由出、莫不本乎五行。乃通於治道也。

（齊詩翼氏學疏證）

の如く之を詳細に述べ、此等の詩を以て配された所の五行が政教の根本であると爲し、又五行より五常に配し、此等五

行に配せられる詩を廢するは即ち五行を廢する事なりとして、詩によりて五行の重要性を説いて居る。結局陳氏は此の四始を以て、治者に對して持して失はざるを説く所の一種の規範説と解して居る様である。確かに此は一理あらう。後漢齊詩家郎顗の上書に

夫求賢者、上以承天、下以爲人。不用之則逆天統違人望。逆天統則災眚降、違人望則化不行。災眚降則下吁嗟、化不行則君道虧。四始之缺五際之戾、其咎如此。（後漢書郎顗傳）

とあり、四始之缺により咎有りとして居るのが、以て四始説の意義に此の一面の有る事の一證と爲すに足るであらう。但し此のみならば此の説は現實の王朝に對する規範説としては、寧ろ特殊なる具體性に乏しいものと云はねばならず、且つ四始説が特に直接に史上に残した足跡も明瞭でないのである。茲に他面の意義が探究せられねばならぬが、吾人は之を五際の説と組合つて行く所に更に大きな意味が有ると思ふのである。

但、五際に關しては、此は又別に一箇の大きな問題であり、異論簇出、今日全く收拾の術を知らぬ狀であり、詳細は機を他日に求むるとして、要するに或長期の歴運の間に於ける一種の歲まはりの變革厄際の説で、其の災厄の性質は謂はゞ前提的にして避け難いものである所に一般諸他災異説と傾向を異にするものが有るが、亥を一際として之を革命の際として説き起して行く依孔穎達毛詩正義説ものであり、前述漢高祖と周の文王・武王との革命創業にからまる問題である。

而して例へば前漢書の齊詩家翼奉の傳に見ても、翼奉に依つて災異の説明として長々と陳述せられて居り、又後漢書郎顗傳に於いても、郎顗に依り長々と述べられた改元奏請の説の中にも此の説を引いて、高祖の起つた年から三才の災に依つて計算を行つてやかましい説を爲して居り、四始説に比して史上に印した足跡がかなり顯著であるのは、一説に災異説としての性質から、此の方が現實の王朝にとつて大問題であつた故であらう。

然らば五際と四始との組合せとは何かと云ふと、先づ前の配詩に於いて言及した如く、四始五際を同時に用ひて、詩と十二辰の配列が極めて巧みに行くのである。されば前掲の如く緯書自身及び齊詩家の説中、既に屢々四始五際を併せ

説き、追鶴壽の如きは

五際必兼四始言之。蓋四始爲之綱、五際爲之紀也。(齊詩翼氏學)

とも云つて居る。殊に黄以周の如きに至つては

齊詩家説、亥爲水始、寅爲木始、巳爲火始、申爲金始、是謂四始。以列推之、子爲水際、卯爲木際、午爲火際、酉爲金際、亥爲天門五行出入聽候之際、是謂五際。(經說略)

の如く、四始を以て、謂はゞ五際を説く爲の素地の様に説いて居る。果して素地に終るや否やは、更に五際との間の關りに就いての深い考察を要するのであるが、黄氏は右の如く説く結果、水際として子を示したが、五際に子の入つて來る事の亥以賤子。……(經說略)と云つて居るが、説明がつかず、「其不舉子者、言亥以賤之也。亥子同屬水、而亥爲五際之主、故舉者の組合せは動かすべからざる明かな事實である。

されば此の亥が一面には周文王・武王又漢高祖の革命即ち前主權の倒壞の時であり、他の一面には周又漢の創業の時でもあり、一事の兩面の意義を有するものであるから、或は二者は一の亥を中心として密接に組合ひつゝ、創業及び其の進展の意識の方は四始にて示し、同様の出發點より、革命及び災厄の意識の方は五際にて述べて、謂はゞ一般に肯定的觀念と否定的觀念とを併存せしめたものではなからうか。

八

之を要するに、詩家の所謂四始説なるものは、毛・魯・韓の三家に於ては、唯に詩其のものを對象として、或は詩の教が人君の興廢に關するものとし、或は詩經の風雅頌の各類が、ある詩又はある數篇の詩を以て代表されるとする程の意の様であるが、獨り齊詩に於ては、此の説が現實の王朝の帝統と云ふ特殊の問題と結んで構成された所に、他の三家の詩説に於いては見る事の出事ない著しい特徴を有ち、又特殊の展開を示してゐる。従つて齊詩に於ては、此が時に附會に陷る傾向の有る事も、寧ろ當然の事であらうか。

現在の詩の大序が、果して毛詩のみのものなりや否やは問題で、緯書の詩説中の詩觀が往々大序中に見ゆるものと一致する所の多きを以て見れば、

或は前人の云ふ所の如く大序は古いもので、四家は此を大夫の色彩を加へて取入れたものであるかも知れない。此の緯書の詩觀が大序中の詩觀と一改する所の多い事實から、吾人は恐らく齊詩にはもともと大序が附して有つたらうと思ふものであるが、此の場合其の序中に四始なるものが有つて、齊詩四始説はそれら附會して成されたものではなからうか。

皮錫瑞が經學通論に於いて之を詩の正傳に非ずとして排し、程易疇が其の義を淺近なりとして

配以大明・四牡・嘉魚・鴻雁諸篇、夫固有所受之、度亦不關至要。吾疑作詩時、不當與十二子相應。……（通藝錄）

などと云つて居るのは、何れも其の附會の點を斥けたもので、一に此は正統儒學研究者としての立場からの論であるが、然し乍ら、儒學の目的の一に經綸の一項の有る事を肯定する限り、諸橋教授著「儒學の目的」と宋儒の活動」參照。此の點の強調される所に

致用の傾向の生ずるのは寧ろ當然であり、更に致用が一轉して附會に走る事亦極めて容易である。又一面より考へれば、漢代の儒家が百家爭霸のさに於いて、儒學の確立を目ざして凡ゆる現實の問題を説き判つ事を手段とした爲に、遂には甚しい牽強に陥つた事も、要するに儒學確立への一の道程として、それはそれなりに、支那文化史の新しい探究の際に當り、研究對象の一斑として立派に存在の價值を有するもので、決して過去の偏狹なる一部經學先生の爲せし所の如く、一概に妄として排し去り之を不問に附するが如き事は、有るべからざる事であると愚考する次第である。

—— 完 ——

昭和十五年十月十七日神嘗祭の夜稿了。